

巻頭言

都城研究拠点のこれまでとこれから

畑作研究領域長 小柳 敦史

農研機構九州沖縄農業研究センターは、熊本県の合志市に本所があり、福岡県の筑後市と久留米市に筑後・久留米研究拠点が、そして宮崎県の都城市に都城研究拠点があります。

都城研究拠点は、今から55年前の1960年（昭和35年）に農林省九州農業試験場畑作部として現在の地に設置されました。当時は、畑作の振興が力強く進められた時代で、ほかにも北海道（現在の農研機構北海道農業研究センター芽室研究拠点）と埼玉県（残念ながら、今はありません）に同じ畑作部が設置されました。

都城研究拠点の現在の常勤職員数は40人、契約職員を含めると70人ほどで、サツマイモ育種、トウモロコシ育種および畑輪作研究を行っています。最近の研究の成果としては、サツマイモ品種「べにはるか」の育成が有名です。本号の記事でも紹介されていますように、「べにはるか」は甘くておいしいだけでなく、サツマイモネコブセンチュウに強く、作りやすい品種で、2007年（平成19年）に品種として公表しました。2012年（平成24年）には、大分県や鹿児島県だけでなく茨城県や千葉県などでも栽培され、全国で約2,000haの作付面積となり、今も栽培面積が増えています。

もうひとつの大きな成果は、1999年（平成11年）の飼料用トウモロコシ品種「ゆめそだち」の育成です。この品種は、中生に属する暖地向きサイレージ用品種で、ごま葉枯病などの病害に強く耐倒伏性に優れ、雌穂の割合が高く、消化性にも優れる極多収品種です。九州・四国地域の春播き栽培用品種として普及しました。この品種については、大学生が使う作物学の教科書（秋田重誠ほか著、作物学（I）食用作物編、文永堂出版）で、以下のように紹介されています。「現在、わが国で栽培されるトウモロコシ品種の販売普及ルートは、海外の大手種苗企業に握られているが、「ゆめそだち」は収量、品質、耐倒伏性に優れる品種として、西南暖地で普及しつつある」などとしたうえで、「品種育成は、品種が栽培される地域の環境下で行うことが望ましく、また経済的理由からも優れた国産品種を育成し、普及栽培することが望ましい」と書かれています。このように、都城研究拠点で育成した飼料用トウモロコシ品種「ゆめ

そだち」は、教科書に取り上げられるほど画期的なものでした。

その他にも、畑作部設置後の初期にはサツマイモやナタネ、麦類や飼料作物の機械化栽培法、乳牛や豚の飼養、大規模機械化営農方式

に関する研究を行い、最近ではサツマイモの機能性成分に関する研究、地域バイオマスの利用法、有害線虫を抑制するための栽培管理、有機農業に関する研究などを行い、持続的で省力的な畑作農業の確立に貢献してきました。

現在、サツマイモの研究では、でん粉原料用、食用、加工用や焼酎用などの品種の育成を行っています。特に、でん粉の性質が特徴的な新しい品種や直播栽培もできる品種作りに取り組んでいます。また、都城研究拠点は農研機構で唯一、サツマイモの交配業務を担っており、交配して得られた種子は農研機構作物研究所（茨城県つくば市）のサツマイモ育種にも使われています。また、飼料用のトウモロコシの育種では、南九州で発生の多い南方さび病やワラビー萎縮症に強く、子実の割合が多くて飼料としての価値が高くなるような品種を開発しています。さらに、畑輪作研究では、大規模営農を目指し、サツマイモの小苗移植による軽労・省力化栽培技術を開発し、ホウレンソウの機械化一貫体系とともに、鹿児島県農業開発総合センターの大隅支場や宮崎県総合農業試験場の畑作園芸支場と協力し、「攻めの農林水産業を実現するための革新的技術緊急展開事業」において、現地実証試験に取り組んでいます。

南九州では、今後も畜産と畑作が農業の中心です。都城研究拠点は、南九州の畑作地帯の中央部にあって、畑作農業の発展のために品種の育成や技術の開発を担っていきます。

